

## アルゼンチンで拡大する柑橘類の輸出

～日本では2003年以降アルゼンチン産レモンが徐々に浸透～

2006年12月11日(月)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

### ～要 旨～

ポストB R I C s の最有力グループ「V I S T A」の一角を占める南米のアルゼンチンは、世界有数の農業立国である。総面積が2,782千平方キロメートルに及ぶ広大な国土(日本の7.5倍)では、大豆や小麦など様々な穀物が栽培・収穫されているが、近年、国際的に認知され、高い評価を得るようになってきたのが各種の柑橘(かんきつ)類である。

アルゼンチンでは、主に国土の北東部地域と北西部地域でオレンジやレモン、グレープフルーツ、タンジェリン(みかんの一種)などが盛んに栽培されている。アルゼンチンの柑橘類の生産量及び輸出量は年々増加傾向にある。主な商品の生産・輸出についてみると、たとえばレモンの生産量は、90年度の65.6万トンから2004年度には149.8万トンへと2.3倍に拡大した。レモンの輸出数量は、90年時点の4万4176トンから2004年には31万6097トンへと7.2倍の規模に膨らんだ。また、オレンジの生産量は、90年度の77.4万トンから2004年度には88.6万トンへと1.1倍に膨らんだ。オレンジの輸出数量は、90年の8万8798トンから2004年には13万6005トンへと、1.5倍の規模に拡大した。

これまでアルゼンチン産の柑橘類の主な輸出先はEU(欧州連合)やロシアが中心であったが、近年では、日本を含めたアジア地域にも輸出されるようになった。日本では、2003年4月下旬に、アルゼンチン産のオレンジやレモン、グレープフルーツの輸入が解禁となった。

アルゼンチン産の柑橘類の輸入については、チチュウカイミバエの寄生などが問題視されていたが、低温処理による完全殺虫と検疫措置がとられることで、輸入が解禁されたという事情がある。

日本はそれまでレモンやオレンジといった柑橘類の多くを米国からの輸入に頼っていたのだが、米国一国への依存度が高まると、天候不順などで米国での収穫量が減少した場合に、供給不安が広がるというリスクがあった。

日本にとっては、アルゼンチン産の柑橘類の輸入が解禁されたことで、天候リスクなどが軽減されるというメリットがある。米国産のレモンは春に収穫期を迎えるが、アルゼンチン産のレモンは夏場に収穫期を迎えるため、夏場にもレモンが潤沢に供給されることになる。日本のレモンの輸入金額に占めるアルゼンチン産の割合は、2005年時点で0.6%にとどまるが、今後はトレンドとして徐々にシェアが上昇していく可能性が高い。

**(アルゼンチンは柑橘類の輸出大国)**

ポストB R I C sの最有力グループ「V I S T A」<sup>(注)</sup>の一角を占める南米のアルゼンチンは、世界有数の農業立国である(2005年の名目G D Pに占める農業のウエイトは8.4%)。

総面積が2,782千平方キロメートルに及ぶ広大な国土(日本の7.5倍)では、大豆や小麦など様々な穀物が栽培・収穫されているが、近年、国際的に認知され、高い評価を得るようになってきたのが各種の柑橘(かんきつ)類である。

アルゼンチンでは、主に国土の北東部地域と北西部地域でオレンジやレモン、グレープフルーツ、タンジェリン(みかんの一種)などが盛んに栽培されている。

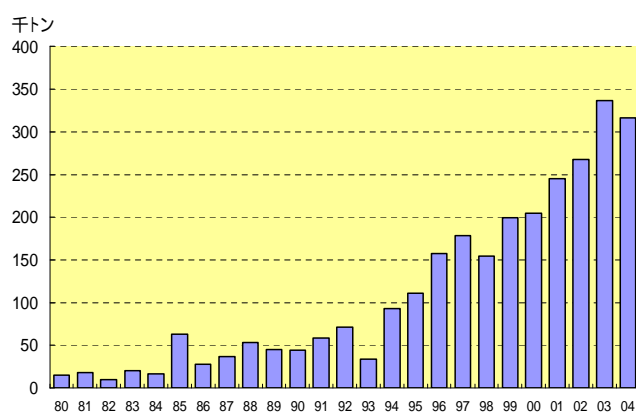
アルゼンチンの柑橘類の生産量及び輸出量は年々増加傾向にある。

主な商品の生産・輸出についてみると、たとえばレモンの生産量は、90収穫年度の65.6万トンから2004収穫年度には149.8万トンへと2.3倍に拡大した。レモンの輸出数量は、90年時点の4万4176トンから2004年には31万6097トンへと7.2倍の規模に膨らんだ(図表1)。

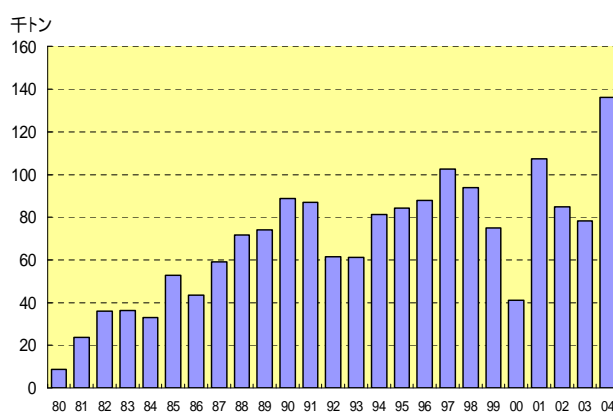
また、オレンジの生産量は、90収穫年度の77.4万トンから2004収穫年度には88.6万トンへと1.1倍に膨らんだ。オレンジの輸出数量は、90年の8万8798トンから2004年には13万6005トンへと、1.5倍の規模に拡大している(図表2)。

一方、グレープフルーツの生産量は90収穫年度の5.2万トンから2004収穫年度には14.9万トンと2.9倍に拡大した。グレープフルーツの輸出数量は、90年代は減少基調にあったが、2000年代に入って再び増加傾向となり、直近の2004年は前年比+4.0%の3万345トン記録した。

(注)「V I S T A」とは、ベトナム(Vietnam)、インドネシア(Indonesia)、南アフリカ(South Africa)、トルコ(Turkey)、アルゼンチン(Argentina)の英語の頭文字をつなげた造語。「眺め、遠望」などを表す英単語「V I S T A」にかけている。「V I S T A」はB R I C s経済研究所が命名。

**図表1 アルゼンチンのレモン輸出数量**

(出所) F A O資料より作成

**図表2 アルゼンチンのオレンジ輸出数量**

(出所) F A O資料より作成

**(日本では2003年からアルゼンチン産レモンなどが輸入解禁に)**

これまでアルゼンチン産の柑橘類の主な輸出先はEU(欧州連合)やロシアが中心であったが、近年では、日本を含めたアジア地域にも積極的に輸出されるようになった。

日本では、2003年4月下旬に、アルゼンチン産のオレンジやレモン、グレープフルーツの輸入が解禁となった。

アルゼンチン産の柑橘類の輸入については、チチュウカイミバエの寄生などが問題視されていたが、低温処理による完全殺虫と検疫措置がとられることで、輸入が解禁されたという事情がある。アルゼンチンからコンテナで日本に柑橘類を輸送する場合、コンテナ内の温度をレモンとオレンジでは2.2度以下に、グレープフルーツは2.3度以下に固定する必要がある。

日本はそれまでレモンやオレンジといった柑橘類の多くを米国からの輸入に頼っていたのだが、米国一国への依存度が高まると、天候不順などで米国での収穫量が減少した場合に、供給不安が広がるというリスクがあった。

日本にとっては、アルゼンチン産の柑橘類の輸入が解禁されたことで、天候リスクなどが軽減されるというメリットがある。米国産のレモンは春に収穫期を迎えるが、アルゼンチン産のレモンは夏場に収穫期を迎えるため、夏場にもレモンが潤沢に供給されることになる。日本のレモンの輸入金額に占めるアルゼンチン産の割合は、2005年時点で0.6%にとどまるが、今後はトレンドとして徐々にシェアが上昇していく可能性が高い。

なお、アルゼンチン産の柑橘類は、他国の柑橘類に比べて圧倒的な価格競争力を誇るが(チリ産よりも割安)、日本に輸入する場合は、輸送などに相当の時間がかかるため、品質の劣化といった問題が残っている。